

令和 3 年 5 月 21 日現在

機関番号：30105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02637

研究課題名(和文)OV・VO言語の方言に見られる類型横断的特性：文末に語用標識を伴う構文化を中心に

研究課題名(英文)A typological study of cross-varietal diversity: the constructionalization of final pragmatic markers

研究代表者

井筒 美津子 (Mitsuko, Izutsu)

藤女子大学・文学部・教授

研究者番号：00438334

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、語用標識を始めとする文末表現の現れ方に関して、通言語的・変異横断的な対照研究を行った。語用標識を発話末(右方周縁部)に含む文構造をfinal-tag constructionと見なし、量的・質的調査を通して、当該構文の定着化が二つの英語変種(アイルランド英語とアメリカ語)によって異なることを明らかにした。また、日本語と韓国語でも、final-appended structure(述部後に何らかの要素が存在している構造)の定着度に違いがあることを観察した。一方、日本語を含む東アジアの諸言語と英語において、文末詞や文末の語用標識の連鎖に類似した連鎖性が見られることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、文末詞が乏しいとされる英語(V0言語)にも、言語変種(アイルランド英語とアメリカ英語)により、語用標識(pragmatic marker)の文末詞的用法の発達に大きな差異があることを明らかにした。この方言的な差異は、日本語(OV言語)において、語用標識の文末詞化に地域差が観察されていることと近似している。また、言語類型的に類似している日本語と韓国語でも、文末要素の現れ方に違いがあることを観察した。このように同一言語の方言や類型論的に近い言語間でも文末詞の発達に違いがあるということを示すことによって、文末詞的要素に起因する方言摩擦への本質的理解の一助となることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：This research project conducted cross-linguistic and cross-varietal investigations of utterance/clause-final (right-peripheral) elements. In contrastive studies of Irish and American English, we analyzed clauses with final tags (final pragmatic markers) as the final-tag construction, and demonstrated both quantitatively and qualitatively that the construction is more entrenched in the minds of Irish English speakers than American English speakers. We also observed from a contrastive study of Japanese and Korean that Korean shows a relatively lower degree of entrenchment of the final appended construction (the structure with post-predicative elements). On the other hand, we found a similarity in the ordering of final pragmatic markers/particles between English and Japanese (and some other East Asian languages), suggesting that the ordering of final pragmatic markers/particles are regulated by a cross-linguistically similar constraint.

研究分野：言語学

キーワード：final-tag construction final particle pragmatic marker constructionalization final position right periphery variational pragmatics typology

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

前回の基盤研究(C) (「擬似共通語表現に起因する「誤解」の研究」)の方言印象調査において、北海道方言の談話断片を関西方言の評価者に聞かせていた折に、北海道方言話者の「まあね。大変だと思うけど、でも。」という発話に対する評価者の解釈が大きく分かれるということが起こった。兵庫県に居住歴の長い評価者らは、この『でも』の用法に強い違和感を覚え、「逆接があるのに、続きにまた同じこと言ってる」と述べる者や、「大変だと思うけど、でも何々あるからいいよね」のように新たな逆接文が続く解釈をする者がいた。一方、大阪府出身の評価者は「私は別に普通です」と述べ、兵庫県出身の評価者達の意見に対し、不可解な表情を見せた。

このエピソードは、方言によって、通常非文末位置に現れる pragmatic marker (語用標識)の文末位置 (right peripheral position 右方周辺部)での使用に許容度の違いがあることを示唆している。大阪方言は、横山やすしの「怒るでしかし」の発話に見られるように、接続詞などの pragmatic marker を文末で用いることが少なくない。文末で用いられる大阪方言の『しかし』については、「文頭に来る場合は「それにしても」、文末に来る場合は「まったく」の意」(www.weblio.jp/content/しかし)という記述もあり、意味の違いも指摘されている。また、北海道方言にも、「これしまってきて、そして」のように、『そして』の文末用法があり(井筒・井筒 2010) 広島方言でも「ナンチュー コトー ユー ナラホイテー」(藤原 1993: 182)のような『ほいで(ほいて)』の文末用法が報告されている。この『ほいで(ほいて)』の文末用法について、藤原(1993: 183)は「『ソナラホイテー』を一つの長大な特定文末詞と見れば、この複合成分のうちには、『ホイテ』(そうして)の文末詞化」が認められると述べている。また、pragmatic marker の文末詞化は歴史的にも盛んである(「うでがうなりと、づかうなり共おたきやれさて」(虎明本・花子)、「どじやうのすしをはうばって、もろはくをのめやれ」(虎明本・張蛸))。『やれ』の文末用法は、「好きにしるやれ」のような形で、今でも福島方言などに見られる(『日本国語大辞典』)。

pragmatic marker の文末用法に方言的差異が見られるという現象は、日本語以外でも指摘されている。Mulder & Thompson (2008)は、英語の *but* の文末詞用法(final particle *but*)について、オーストラリア英語には見られるが、アメリカ英語にはないと述べている。本研究代表者ら(Izutsu & Izutsu 2014)は、Mulder & Thompson の研究をさらに正確に捉え直し、“Nice day, but.”のように通常節頭位置に生起する *but* が文末位置に現れる用法を backshift type、“Excuse me, but, …”のように *but* 以下の内容を途中で言うのを止める、いわゆる「言いさし文」(白川 2009)に当たる用法を truncation type と呼び、文末位置の等位接続詞の用法を区別した。その上で、オーストラリア英語、ニュージーランド英語、アイルランド英語などには backshift type と truncation type の両方が見られるが、アメリカ英語には truncation type しか見られないと結論付けた。また、アイルランド英語には、“I’m just putting on the kettle.” “I’ll have a cup of tea so.”のような接続副詞 *so* の文末用法もあると報告されている(Hickey 2007: 371)。

このように、pragmatic marker が文末に現れることはこれまで観察されてはいるが、これらの文末用法に対する方言・言語変種による許容度の違いや、その違いを生み出す社会言語学的要因、さらには、語彙種別や文法範疇による文末位置への指向性の差異などを扱った研究はあまり見られなかった。ましてや、方言差を構文化という観点から体系化し、他方言・言語変種との比較を通して、その体系性に類型横断的特性を見出そうとした研究は、本研究課題以前はほとんど行われていなかったと言ってよい。

2. 研究の目的

本研究は、構文化(constructionalization)の観点から、英語と日本語の諸方言に見られる pragmatic marker (語用標識)の文末詞化を考察し、そこに見出される類型横断的な特性を明らかにすることを目的とする。まず、(1) pragmatic marker を文末(右方周縁部)に含む文構造を文末付加語句構文(final-tag construction)と見なし、コーパス及びアンケート・インタビュー調査を通して、当該構文の拡張性や定着度が方言によって異なることを詳らかにする。その上で、(2) 文末詞が乏しいとされる VO 言語の言語変種にも、OV 言語の諸方言と類似した構文化の特性が存在するのかを検証する。これにより、類型論研究が、単に言語間の類似性や相違性を対象とするに留まらず、各言語の諸方言に見出される体系的多様性や特異性をも、言語の差異を超えて比較・検証し得る枠組みとなることを示す。

3. 研究の方法

(1) 研究目的を達成するための具体的な方法として、文献調査から pragmatic marker の文末用法の発達に顕著な違いがあると推察される英語二変種(アイルランド英語とアメリカ英語)と日本語諸方言(北海道、東京、大阪)について、方言(言語変種)コーパスを用いて量的調査を実施した。量的調査の結果、final-tag construction の拡張性や定着化に方言的(言語変種)差異が観察された場合、さらにアンケートやインタビューなどの質的調査を行った。併せて、言語類型的に近い言語(日本語と韓国語)を比較し、類似構文の定着化の違いについても調査した。日韓語比較分析には、日本語小説とその韓国語訳を使用した。また、文末に現れる pragmatic

marker/particle の順序性についても、英語と日本語の対照研究を行った。

(2) その他発展的研究として、日本語の文末詞や終助詞について、当該分野に従事する海外研究者の認知度が極めて低く、誤解されている部分もかなりあることが判明したため、文末詞研究の一環として、日本語終助詞と間投助詞の違いや日本語の文末表現などが有する独話性と日本におけるツイッター普及の問題に関する研究なども併せて行った。

4. 研究成果

(1) 英語 (VO 言語) については二言語変種(アメリカ英語とアイルランド英語)のコーパス (Santa Barbara Corpus と SPICE-Ireland) を用いた量的調査を実施し、タイプとトークン双方の点で、アイルランド英語の方が final-tag construction の構文的定着化が進んでいることを明らかにした(図1参照)。この成果は、2nd International Conference on Grammaticalization: Theory and Data (2016) で発表し、その内容をまとめたものを海外学術図書の一論文として出版した

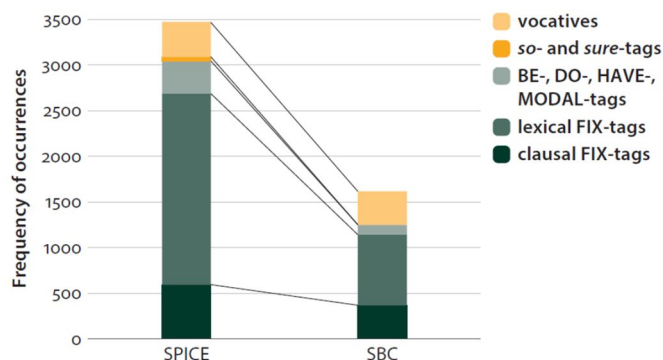


図1 (Izutsu and Izutsu 2018: 393)

(雑誌論文 2018)。さらに、コーパス調査により明らかになったこれら二つの言語変種の final-tag construction の定着度の違いが、二言語変種話者による文末接続詞の解釈の違い(final-particle interpretation/final-hanging interpretation)にも現れるかについて、アンケートとインタビューによる質的調査を実施し、接続詞の final particle 用法に関する米語話者の解釈モデル(図2)を提唱した。この成果は、Discourse-Pragmatic Variation & Change 4 で発表し、後に英語論文としてまとめ、国際雑誌に掲載した(雑誌論文 2020 “American and Irish English speakers’ perceptions of the final particles so and but”)

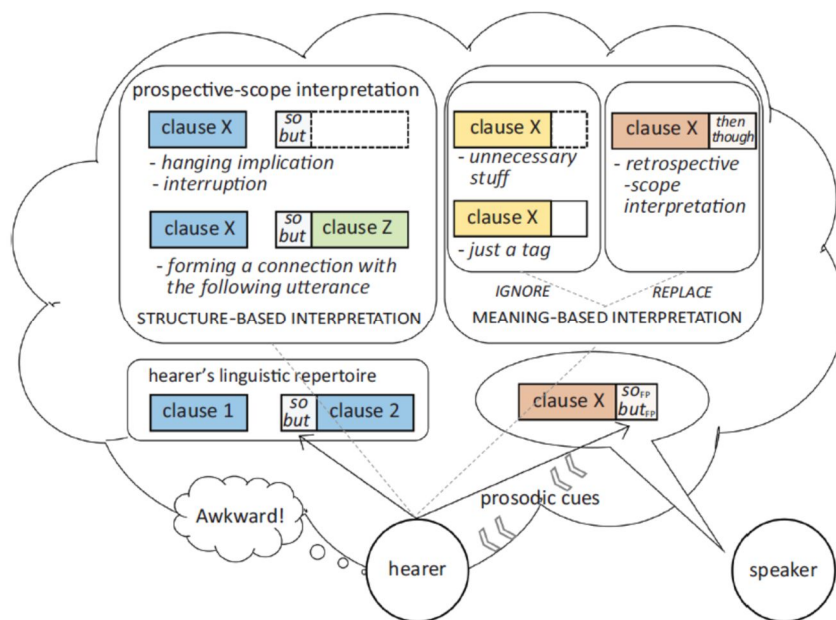


図2 (Izutsu and Izutsu 2020)

日本語については、日本語コーパス (BTS コーパス 1) と 2 つの方言コーパス (全国方言談話データベース日本のふるさとことば集成、北海道方言コーパス) を使用して、北海道、東京、大阪の方言話者による文末の pragmatic marker の用法に関する予備調査を行った。これらのコーパスによる予備調査の結果、日本語では pragmatic marker の文末詞化に際だった方言的差異が認められなかった。

そこで、言語類型的に類似している日本語と韓国語の final-appended structure (述部後に何らかの要素が存在している構造) の対照研究を行った。その結果、二つの言語は final-appended structure における拡張性と定着化という点で違いが見られることが明らかになった。この成果を 2020 年 3 月にフランスで開催される学会(Third International Conference on grammaticalization theory and

data)で発表する予定であったが、Covid-19の影響で学会の開催が延期された。この日本語と韓国語の調査の結果から、final-tag constructionの定着化は、少なくとも言語類型的に類似している日本語と韓国語において、英語の言語変種に見られるような差異が観察されることが明らかになってきた。

これら一連の研究から、文末詞が乏しいとされているVO言語(英語)のfinal-tag constructionの定着度は、量的調査・質的調査ともに、アメリカ英語とアイルランド英語という二つの言語変種で大きく異なるということが明らかになった。一方、文末詞が豊かに発達しているOV言語(日本語)のfinal-tag constructionの定着化については、コーパスを活用した量的研究からは際だった方言的差異は観察されなかった。この結果は、「研究開始当初の背景」で述べた観察から導き出される想定とは異なっていたが、その理由として、使用した方言コーパスの会話収録数の少なさが影響していると考えられる。これまでの先行研究(藤原 1986, 1993、井筒・井筒 2010など)で、日本語でも pragmatic markerの文末詞的用法の発達に地域差があることが報告されていることを考えると、OV言語とVO言語という類型論的差異を超えて pragmatic markerの文末詞的用法に類型横断的な言語変種(方言)差があるという可能性は現時点では否定できない。今後は『日本語諸方言コーパス(COJADS)』などのより大きな言語資料を活用することにより、final-tag constructionの日本語方言における差異について検証していく必要があるだろう。一方、日本語と同じように、文末表現(終結語尾)が比較的発達していると言われている韓国語との比較では、final-appended structureにおいて、文末に生起可能な要素の種類や生起頻度に違いがあることが分かった。このことは、同じOV言語でも、述語以外の要素を文末に置くことができる許容度の違いが、これら二言語に見られることを示している。このことは、文末位置の活用度や語順の自由度という点について言語的特異性があることを示しており、日韓語研究のさらなる可能性を示唆している。

さらに、日本語と英語の文末詞に関する言語横断的研究として、文末の pragmatic particle/markerの連鎖の問題にも取り組み、その成果を第16回国際語用論学会(2019)で発表した。その中で、英語の文末に現れる pragmatic marker (PM)の連鎖(例: ... *though, right?*)にも、日本語などの東アジア諸言語の文末詞の連鎖に類似した順序性(subjective pragmatic marker > intersubjective pragmatic marker)が見られることを明らかにした。この口頭発表の成果は、英語論文としてまとめ、国際雑誌(*Journal of Pragmatics*)に投稿し、2021年4月に受理された。

(2)また、西欧の諸言語における文末詞等の非項要素(non-argument elements)の研究動向に着目し、欧州の二組の研究者(Heine, Kaltenböck, & Kuteva; Haselow)によって近年提案された広義の「文法」の二層性(thetical/sentence grammar, macro/microgrammar)を唱える理論への批判的検討を行った。北アイルランドで開催された第15回国際語用論学会(2017)では、日本語や英語の文末表現の順序性の観点から、これらの理論の二項対立的言語観に異議を唱えた。The International Workshop: One Brain – Two Grammars? (2018)では、研究対象を東アジアの諸言語にも広げ、これらの理論に対する再検討を試みた。2020年には、これら一連の研究成果を論文にまとめ、海外学術図書に掲載した(雑誌論文 2020 “Dichotomous or continuous?”)。加えて、「文法」の二層性に関わる問題として、第14回国際認知言語学会(2017)では、pragmatic markerの機能を中心に、話し言葉と書き言葉における言語産出の概念作用の違いに関する発表を行った。本発表は、英語論文にまとめ、電子雑誌に掲載した(雑誌論文 2017)。さらに、同学会では、日本語文末詞(終助詞)が持つ独話性の観点から、日本におけるツイッター普及の問題を考察し、日本語・英語のツイッター・データの比較分析も行った。その成果は、英語論文としてまとめ、国際雑誌に掲載した(雑誌論文 2019)。また、文末の pragmatic markerの研究を進める中、日本語の文末詞・終助詞について、海外の研究者の理解が十分ではないことが分かってきたため、日本語の終助詞と間投助詞の違いについて、情報構造等の観点から分析を行い、その成果を第51回ヨーロッパ言語学会(2018)のワークショップで発表し、その成果を海外学術図書の一論文として出版した(雑誌論文 2020 “Final or medial”)

<引用文献>

- 藤原与一. 1986. 『方言文末詞<文末助詞>の研究(下)』東京: 春陽堂書店.
藤原与一. 1993. 『言語類型論と文末詞』東京: 三弥井書店.
Hickey, Raymond. 2007. *Irish English: History and Present Forms*. Cambridge: Cambridge University Press.
井筒美津子・井筒勝信. 2010. 「おかしいしょ、そして」: 北海道の話し言葉で用いられる『そして』の意味・機能的方言特性. 『社会言語科学会第25回大会発表論文集』pp. 78-81.
Izutsu, N. Mitsuko & Izutsu, Katsunobu. 2014. Truncation and backshift: Two pathways to sentence-final coordinating conjunctions. *Journal of Historical Pragmatics* 15(1): 62-92.
Izutsu, N. Mitsuko & Izutsu, Katsunobu. 2018. Cross-varietal diversity in constructional entrenchment: The

- final-tag construction in Irish and American English. In Sylvie Hancil, Tine Breban and José Vicente Lozano (eds.) *New Trends in Grammaticalization and Language Change*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 381-430.
- Izutsu, N. Mitsuko & Izutsu, Katsunobu. 2020. American and Irish English speakers' perceptions of the final particles *so* and *but*. *World Englishes*.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会. 2000-2002. 『日本国語大辞典（第2版）』東京：岩波書店。（データベース「JapanKnowledge」）
- 白川博之. 2009. 『「言いさし文」の研究』東京：くろしお出版.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Izutsu Mitsuko Narita, Izutsu Katsunobu	4. 巻 -
2. 論文標題 American and Irish English speakers' perceptions of the final particlesoandbut	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 World Englishes	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/weng.12521	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Izutsu Katsunobu, Izutsu Mitsuko Narita	4. 巻 -
2. 論文標題 Dichotomous or continuous? Final particles and a dualistic conception of grammar	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 In Alexander Haselow & Gunther Kaltenbock (eds.) Grammar and Cognition: Dualistic Models of Language Structure	6. 最初と最後の頁 159 ~ 190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/hcp.70.05izu	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Izutsu Mitsuko Narita, Izutsu Katsunobu	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 Why is Twitter so popular in Japan? Linguistic devices for monologization	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Internet Pragmatics	6. 最初と最後の頁 260-289
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/ip.00030.izu	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Izutsu Mitsuko Narita, Izutsu Katsunobu	4. 巻 なし
2. 論文標題 Final or medial: Morphosyntactic and functional divergences in discourse particles of the same historical sources	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Pierre-Yves Modicom and Olivier Duplatre (eds.) Information-Structural Perspectives on Discourse Particles	6. 最初と最後の頁 136-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.213	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Izutsu Mitsuko Narita, Izutsu Katsunobu	4. 巻 なし
2. 論文標題 Cross-varietal diversity in constructional entrenchment: The final-tag construction in Irish and American English.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Hancil et al. (eds.) New Trends in Grammaticalization and Language Change.	6. 最初と最後の頁 381 ~ 430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/slcs.202.16izu	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 Mental gaze monitoring and form manipulation: distinct conceptions of language production and its management	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Lege Artis: Language yesterday, today, tomorrow	6. 最初と最後の頁 47-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/lart-2017-0013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Izutsu Mitsuko Narita, Izutsu Katsunobu
2. 発表標題 Very simple, though, isn't it? Pragmatic marker sequencing at right periphery
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (Hong Kong, China) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mitsuko N. Izutsu, Katsunobu Izutsu
2. 発表標題 Why is Twitter so popular in Japan? Linguistic devices for monologization
3. 学会等名 14th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu, Mitsuko N. Izutsu
2. 発表標題 Adding or compacting forms for meaning accumulation: Distinct conceptions of language production motivating different grammars
3. 学会等名 14th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Mitsuko N. Izutsu, Katsunobu Izutsu
2. 発表標題 Regularity outside argument structure: Sequential ordering in final position
3. 学会等名 15th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Katsunobu Izutsu, Mitsuko N. Izutsu
2. 発表標題 Dichotomous or continuous? What East Asian languages reveal about a dual conception of grammar
3. 学会等名 The International Workshop One Brain -Two Grammars? Examining dualistic approaches to grammar and cognition (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuko N. Izutsu, Katsunobu Izutsu
2. 発表標題 Cross-varietal differences in prospective/retrospective preference: The perception of final connectives by Irish and American English speakers
3. 学会等名 Discourse-Pragmatic Variation & Change 4 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mitsuko N. Izutsu, Katsunobu Izutsu
2. 発表標題 Final or medial: Morphosyntactic and functional divergences in discourse particles of the same historical sources
3. 学会等名 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	井筒 勝信 (Izutsu Katsunobu) (70322865)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	2018年「連携研究者」廃止により、「研究協力者」に変更。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------